

【研究ノート】

視害に障害を持つ人に配慮された触れる展示の発達比較
— 日本と英国の博物館 —

Touch exhibition for people with partially sighted and blind
— A comparison Japan with the United kingdom —

大西 万知子^{*}
Machiko ONISHI

Nowadays, touch exhibitions have been developing in museums in many countries. These exhibitions serve to enhance an educational role through museums and to open there to various people, especially, people with partially sighted and blind. The purpose of this report is to show us one of methods to develop touch exhibition for people with partially sighted and blind successfully in Japan. Here, it will be discussed based on a comparison Japan with the United Kingdom.

はじめに

今日、多くの博物館で、触れることのできる展示が見られるようになった。この触れることのできる展示は、神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員の奥野花代子氏の「全国の博物館圏における視覚障害者の対応に関するアンケート調査結果報告」(総合博物館も含めて全国科学博物館協議会加盟圏233館と全国の国公立の主な人文系博物館圏181館を対象に1997年4月末から6月に実施)『神奈川県立博物館研究報告自然科学』27号(1998)によれば、回答が得られた対象博物館338館のうち、22.8%の77館の博物館が基本的に展示物に触れることとし、約半分の44.7%の151館の博物館が触れるコーナーがあると報告されている。このことから、約半数の博物館が、触れる展示を用意していることが推測できる。

また、この触れる展示の種類や表現手段も多岐にわたっており、呼び方も「体験型展示」や「ハンズ・オン」(参加体験型展示)と一様でない。設置場所も、一般展示室だけでなく、体験学習室やディスカバ

リールーム、チルドレン・ミュージアムやサイエンスセンターなどの部屋や施設など、様々である。こうしてみると、今日、触れる展示は、様々な来館者を魅了しており、博物館と来館者を結ぶ強力なコミュニケーションとしての役割を果たしていることがわかる。

しかし、その一方で、博物館予算削減、商業主義的発想、安易な展示設計のような触れる展示の設置に混乱や曖昧さをもたらす要素は、実際、数多く存在している。このような要素に影響されず、来館者にとって、効果的で魅力的な触れる展示として発達していくために、今後日本の博物館の触れる展示は、どのような要素に注目していくべきであろうか。本稿では、とりわけ「触るという行為」が日常生活で、極めて重要な役割を果たしている視覚に障害を持つ人に配慮された触れる展示に限定する。そして、これらを日本と英国の2国の博物館においての流れをたどり、その比較から、今後日本の博物館においてその展示の発達に必要な要素を見いだしてみよう

* レスター大学院 (University of Leicester, the United Kingdom)

平成10年1月7日受理

思う。

盲学校では、触って観察することを「触察」という言葉を使用することから、本稿において「視覚に障害を持つ人に配慮した触れる展示」を使用する場合、広義の意味での触れる展示と区別するために「触察展示」と記す。また、「視覚に障害を持つ人」を「視覚障害者」と記すことを筆者自身、躊躇する。なぜならば、近年、国際機関や英語圏の諸国では、障害を人の個性の一部と見る視点から、障害者 (the disabled, disabled person) から障害を持つ人 (person with disability) へと、「障害」から「人」へと呼称の強調する点に変化してきているからである。しかし、本稿では、日本の法律に従い、以後、視覚に障害を持つ人を「視覚障害者」と記すことにする。

1. 触れる展示の役割

なぜ、博物館に「触れる展示」が必要なのであるのか。この問いかけは、あまりにも当たり前のものかもしれない。しかし、この問いに答えることができれば、博物館において数の上で触れる展示が多く存在していても、本当の意味での役割を果たしていないことになる。そこで、日本と英国の触察展示を比較する前に、最初に博物館の触れる展示の持つ役割について整理してみようと思う。

まず、触れる展示は、来館者へ「展示の多様な情報」を伝えることができる。例えば、私たちはあらゆる事物や現象に取り囲まれながら生きており、それらの取り巻くすべてのものを、私たちの持っているさまざまな感覚—視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚を通じて知り得ることができる。その感覚の中で、私たちが情報を得ようとする場合一番多く使う感覚は視覚で、80%以上の情報を視覚から得ているという(成子、1997)(倉田・矢島、1997)。視覚で得られる情報の速さや一度に得られる情報の量に比べて、触覚は両者の点において劣るものの、視覚では得ることのできない多種多様な情報—その物の手触り、感触、重さ、堅さ、冷たさなどを来館者へ伝えることが可能である。

また、触れる展示は、来館者へその展示の実感—つまり「展示の確かさ」を提供することができる。名古屋市美術館学芸員の天野氏(名古屋市美術館、

1989)は、「触れることの良さは実感にあると思う。触れているかぎり、触られているものの存在は否定しようがない。目が捕まえる世界に虚構がありうる。」と、そのことを端的に述べている。

さらに、触れる展示は、来館者へ優れた「展示の記憶」をもたらすことができる。認知心理学の分野から、触るという行為は、他の感覚と比べて物を記憶するうえで勝っていることが実証されている。そのことは、倉田公裕・矢島國雄の著書『博物館学』(1997)や英国の博物館教育者ホッパー・グリーンヒル氏の著書の『Museums and their visitors』(1996)など国内外に広く紹介され、またチルドレン・ミュージアムの理念ともなっている。これらの著書や理念によれば、私たちは読んだことは10%、聞いたことは20%、見たことは30%、体験(触ったことを含む。)したことは90%思い出すことができると述べている。

また、触れる展示は、多様な来館者の参加を可能にする。例えば、子供たちである。子供たちは、物に触れることを本質的に好む。また、ホッパー・グリーンヒル氏は、上記の著書『Museums and their visitors』(1996)の中で、子供たちにとって物を触って学ぶことは、難しい字を読んだり多様な言葉を話すことなく、技術や知識を伸ばすことを指摘している。恐らく、このことは子供たちだけでなく、私たちが観光などで言語の解読が困難な国へ訪れた場合も同様のことがいえるであろう。

そして、触れる展示は、視覚障害者へも展示の共有を提供できる。なぜならば彼らにとって、物に触れることは生活の上で極めて重要な役割を果たしているからである。例えば、平成7年3月16日、「鎌倉手で見える芸術祭シンポジウム」の発言者の1人、ホエル・コーベスト氏(当時フランスのラ・ヴィレット (la Villette) の視覚障害者アクセス部門主任)は、「見えないということは、直接に触れて近くすることを強いることです。」と述べている。また、『大英博物館プリーズタッチ』(1985)の報告書の著者、コール氏は、「視覚に障害を持つ人にとって、触ることは物を知る上で、ごく自然なことである。」と記述している。

以上のことをまとめてみると、博物館において、触れる展示の役割は、大きく2つあると考えられ

る。一つは、触れる展示は、その展示の持つ意味(メッセージ)を豊かさ、確かさ、強さを持って来館者へ伝えることで、展示のメッセージを効果的に来館者へ伝えるというものである。もう一つは、視覚的な展示に比べ、触れる展示は、子供や視覚障害者など、様々な来館者へわかりやすく展示のメッセージを伝えることができるという役割である。つまり、触れる展示は、博物館の「教育的利用」と「公的還元」の機能を高めることに貢献しているといえる。

その中で、本稿の対象である触察展示は、かつては多くの展示が触ることが許されず、視覚障害者にとって無縁の存在であった博物館を開いていくための有効な方法として、特に1981年国際障害者年をきっかけに広がるようになった。そのためこの触察展示は、博物館の「教育的利用」と「公的還元」の機能を高めると同時に、視覚の障害を超えて、私たちが「人としての自由な文化的活動の享受」の機会の共有をできるようになったことへも、大きな役割を果たしている。

2. 日本の触察展示史

日本では、初期の触察展示の報告は1960年代に見られ、1964年の上野動物園での盲学校からの教育的要請による触察展示の触察ツアーの文献にまで溯ることができる。『博物館研究』の報告(1964)の中で小森学芸員は、触察ツアーの様子を「盲人のためのコース」を作り、触れる大型草食獣とそれを支える「補助的な資料-剥製標本、シカ類の角、サイの角、ゾウ、カバの牙等、を準備し、さらには、音声のライブラリーも備えた。」と述べている。また、氏はこの報告の中で、どのように触察ツアーを用意するのが望ましいか、また、博物館での触れる展示の大切さにも触れている。同年、東京教育大学附属盲学校の教諭である谷合氏は、『博物館研究』の中で、盲人の実物に触ることの大切さと博物館でもっと触れるものへの要望を述べている(谷合、1964)。

1967年、大分生態水族館では、「耳と手で見る魚のコーナー」を設置し、それをもとにし、1982年、和歌山県立自然博物館でも「手で見る魚の国」を設置した。これらの触察展示は、盲学校の要請により始まった(中島、1981)。その後、1981年栗林公園動物園では、報告で、すでに五感を使って物事を考

えることを意識しており、特に視覚障害者に対して、生体観察用と骨格観察用と2通りの触れる動物と標本を用意し、生体としてトカラヤギ、ウサギ、アカガエルを一頭づつ、骨格としてヒョウ、ウマ、サル頭蓋骨各1点、ゾウの歯一点を準備し、解説テープをも作成している(香川、1981)。

1980年代になると、1981年の国際障害者年の影響により、視覚障害者の博物館への参加、つまり、アクセスを目的として触察展示が見られるようになる。多くの博物館が触察展示のための特別コーナーや特別室を設置した。例えば、特別に設けられたコーナーとして、1979年の岐阜県博物館「視覚障害者のためのコーナー」の設置、1983年の名古屋市博物館「触れてみる学習室」、同年の埼玉県立自然史博物館での「視覚障害者コーナー」、山梨県立美術館の「手で見るミレー」の設置、1984年の大阪市立自然史博物館の触察展示5点追加などである(名古屋市立博物館、1981)(久住・三輪、1981)(大橋、1983)(拓殖、1995)。

短期的な企画展示、もしくは特別展示として、1979年の西武美術館「手で見る展示」、1986年の三重県立美術館「アルプ展」、1993年の北海道立近代美術館などでの「トム移動展」、1989年の兵庫県立近代美術館「美術の中のかたち」、1989年の名古屋市美術館「手で見る美術展」などがあげられる(角田、1993)(平井、1993)(森本、1993)。この中で、兵庫県立近代美術館の「美術の中の形」は、この1989年以来、毎年夏に行なわれている特別展示である。この特別展示に対し美術館は、ラジオや新聞紙『点字毎日』などを利用しての広報の工夫、美術館職員全員のための視覚障害者の理解のための事前研修、展示キャプションのための点訳ボランティアとの連携、見学後の来館者の意見を聞くためのアンケートの実施などを行っており、体系的な取り組みをしている。また、この時期の特別展の珍しい例として、1981年、宮城道雄記念館の活動があげられる。この記念館は、宮城道雄氏自身、盲人の音楽家であったことから、本来常設展示として触察展示が多く設置されているが、この年、講演会「盲人楽譜の原理と実際」と音楽会「盲人と音楽」が行なわれた。触察展示に加えて、聴覚的な教育プログラムという様々な感覚を利用したものとして、日本では先がけといえる(1981)。

さらに、1980年代の大きな存在として、1984年4月に東京都渋谷区に設立されたギャラリー・トム（ギャラリー・オブ・タッチ・ミー・アート）があげられる。このギャラリーは、全国の美術館が視覚障害者も晴眼者と同じように自由に芸術的な環境に触れられるような美術館になってほしいという思いから設立された。このギャラリーは、名古屋市美術館などの他の美術館への展示協力やアメリカのフィラデルフィア美術館の「フォーム・イン・アート」展などの海外の美術館の展示の紹介、全国の盲学校の優秀な芸術作品に賞を与えるトム賞の実施、また1985年には、美術館を視覚障害者に開いていくことや触察展示の存在の重要性を述べた『彫刻に触れる時』（用美社）の出版協力をするなど、その活動範囲は多岐にわたっている。視覚障害者と美術館との強力なかけ橋の役割を果たしている。

1990年代になると、触察展示は、セミナー、ワークショップ、ガイドツアーという様々な教育プログラムの中で模索されるようになる。1990年、三重県立美術館で館蔵品による「触れる彫刻展」が行なわれた。この企画展は、この美術館のボランティアグループ「櫂の会」が視覚障害者の案内や解説を行なった（森本、1993）。1994年10月の「心で見る美術展—私を感じて」（名古屋市美術館）では視覚障害者の展示解説方法や誘導についての5回にわたるワークショップ、1995年3月「手で見る芸術祭」（鎌倉市福祉会館）では触察展示と同時にシンポジウムや盲人の方による楽器演奏などがあげられる。1997年2月、3月に目黒区美術館では、触察展示と共に、講座の一環として「手で見るこどもたち」の映画会や「障害者と美術館—日本とアメリカ」と題した講演が行なわれた。

1997年の夏には、日本障害者芸術文化協会が主催し東京都美術館で「エイブル・アート'97—魂の対話」を行ない、触察展示を含む障害者の芸術活動への参加機会を促し、また会場のボランティアの活動などを積極的に行なった。これは、1999年の2、3月にも再び同館で予定されている。また、この協会は、近年から美術館のバリアフリーの状況を知るために、各地で調査スタッフを集めて美術館の訪問調査を続けており、博物館の外から、博物館へ働きかけている。

また、海外の博物館の障害者対応や触察展示に精通した人々による講演も行なわれるようになる。1997年7月19日にはジュリア・カシム氏による「開かれた美術館」（光と緑の美術館）、1997年9月17日のアン・ピアソン氏による「障害者に開かれた美術館」（ギャラリー・トム主催）などの講演が実施されている。近年においても1998年3月22日に神奈川県立生命の星・地球博物館で「ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館」のテーマのもとにシンポジウムが実施された。

1990年代には、博物館学に基づいた、触察展示についての調査研究の論文等が見られるようになる。例えば、拓殖千夏氏の「視覚障害者と博物館」（1995）、奥野花代子氏の全国の博物館における視覚障害者の対応に関する調査研究報告書（1998）、当事者を交えた調査である鳥山由子氏らによる「目の不自由な人のための優しい博物館のあり方を求めて」（1998）などである。

また、外国の触察展示の報告や実際例も多く紹介されるようになった。例えば、河野哲郎氏による1993年の「欧米の博物館と障害者」および、1994年の「英国における博物館とギャラリーのための障害者に関するガイドライン」、また佐藤厚子氏による「大英博物館とルーブル美術館における視覚障害者のためのツアー」（1993）などである。外国の触察展示の紹介としては、1997年11月11日から25日まで、東京都障害者福祉会館において「手で見るアート展」の開催がある。これは1995年フランダース政府部の開催で、パリのユネスコ本部で開催されたのちドイツへ巡回し、日本へ紹介されたものである。この時、ベルギーの現代アーティスト27名による30作品の紹介で、そのオリジナル作品をもとに触れる作品が用意された。

こうして、日本の触察展示の発達の流れをみると、1960年代に先がけとして初期に見られる触察展示は、生きた動物の利用とともに触察展示を盲学校への教育的利用を目的として、特に動物園や自然史博物館などの自然系博物館において多く開始された。これらには、盲学校の教諭からの積極的な働きかけがみられる。

1980年代に入ると、盲学校への教育利用というような目的を絞った触察展示の設置から視覚障害者の

博物館へのアクセスという、より広い観念に基づいての触察展示が発達し始める。この時期の特徴として、常設よりも企画的なもの、また一般展示に置かれるよりもむしろ一つの場所に集められた特別コーナーとして存在している。

1990年代には、様々な教育プログラムの中に見られるようになり、また、1980年代にはあまり見られなかった欧米諸国の触察展示の紹介や触察展示の研究報告書が見られるようになったことが注目できる。

3. 英国の触察展示史

英国の本格的な触察展示の始まりは1970代後半からである。その最初の展示は、1976年のロンドンのテートギャラリーの「Sculpture for the blind」である。これは、視覚障害者だけでなく、すべての人に開かれた。1980年、テートギャラリーで、再び「Sculpture for the blind」が行なわれた。しかし、この場合、資料の保存のため、視覚に障害を持っている来館者に限定されている。

1981年、大英自然史博物館では、「Exploring Woodland and Seashore」を行なっている。これは、視覚障害者だけが触れることができ、森の中や海辺に沿って歩けるようになっており、約20個の触れる模型や標本が用意された。今回の場合、来館者の評判はよかったものの、広報の仕方の反省から、1983年にこの企画展示が再び行われた。1981年、ウルスター博物館においても、貝や岩石などを利用して「A Sense of Touch」という特別展を行なっている。

大英博物館では1983年に「Please Touch」および1986年に「Human Touch」を行なっている。1983年の特別展の時は、アンケートの実施や来館者調査など英国の博物館で初めての本格的な展示評価の報告書が発行された。

1985年には、ノッティンガム城博物館とArts Council（以後、英国芸術審議会）が「beyond appearance」を行ない、15人の彫刻家の作品を紹介する。1988年、触れる彫刻展として、リーズ市立博物館とウオーウィック大学内にあるアートセンターが共催で、「revolutions for the Hand」を行なっている。

1980年代中頃から、触察展示に関する報告書の作成、セミナーや会議の実施が目立ち始める。例えば、報告書の例として、カーネギー英国トラストでは、2つの報告書を1998年に発表する。その一つは、アッテンボロー報告書と呼ばれるもので、車椅子利用者や視覚、聴覚障害者などが博物館を利用しやすいように博物館の建築改善に関する資金調達の提案をまとめたものである。もう一つは、アン・ピアソン氏による「Art for everyone」で、博物館だけでなく、劇場や映画館なども含めた文化施設での障害者への対応方法を示唆したものである。英国芸術審議会では1985年に、障害を持つ人への芸術活動と博物館情報のための「The Arts and Disability directory」を発行している。一方、セミナーの具体的な例としては、1988年の「Talking Touch」が Museums Association（以後、英国博物館協会）と Royal National Institution for the Blind（以後、英国王立盲人協会）で行なわれている。これは、最初の視覚障害者と博物館の世界を跨いだ国レベルの会議であった。同年4月、「Disability, Design, Museum」というセミナーが Museum Galleries Disability Association と共に行なわれた。この会議は、障害者の利用しやすい博物館の建築や設備に関するものであった。この Museum Galleries Disability Association とは、英国博物館協会内にあり、障害に関係なく博物館従事者と一般に広く開かれており、博物館での障害者へのサービスに関するセミナー、出版の実施、関連情報収集や提供を行なっている。

さらに、1980年代後半には、博物館の活動のさまざまな基準を示したガイドラインが登場する。1988年「Museums Galleries Commission」（以後、博物館とギャラリー審議会）では、「Museums Registration Scheme」を作成し、英国の博物館の管理運営、収集品の管理、来館者サービスの点において、最低基準を満たすことを奨励している。

1990年代になると、1980年代のガイドライン作成に続き、触察展示や障害者対応に関する専門的なガイドライン、博物館従事者の博物館活動に対する態度や姿勢について道徳的基準を示したガイドラインなどが作成されるようになる。代表的なものとして、1993年、博物館とギャラリー審議会は「Disability

Resource Directory for Museum」(1993)を作成し、障害を持つ来館者のための博物館活動のあり方を提案し、その中で触察展示についての政策や、設置方法の記述を含んでいる。

また、英国博物館協会は1991年に「The code of Museum for professional」を作成し、1994年には「The code of museum governing bodies」を作成している。前者は、学芸員やボランティアなど、すべての博物館従事者に対して博物館活動に関する道徳的基準を提供しており、その中に、彼らが障害者へのアクセスの意識を持つ責任を含んでいる。後者は、博物館の指導機関(理事会など)に対して、博物館活動の道徳基準の提供とあらゆる来館者に博物館活動のアクセスを確実にすることを求めている。

また、触察展示に関するガイドラインは、博物館の分野以外からも作成されている。例えば英国王立盲人協会は1992年、「Making Accessible Museum」を作成する。これは、触察展示の設置の方法だけでなく、視覚障害者への理解、接し方、誘導方法、展示解説方法などを詳しく記述している。また、この組織は1993年、「Discovering Museums」を発行し、英国の各博物館で視覚障害者に対して、触察展示が用意されているかなどを紹介している。これは、視覚障害者が博物館を訪問する上で大変役に立っていると推測できる。この協会は、さらに1995年には「Museum, Galleries and Heritage Attractions」や「User Guide」などを発行し、博物館を含む娯楽、教育施設、歴史建造物の視覚障害者へ行なわれているサービスの内容を紹介している。

1990年代の触察展示の記述は、各博物館の具体的な報告と共に、総括的な触察展示についての出版がなされるようになる。その代表的なものとして、ホッパー・グリーンヒル氏による「Touch exhibition」『Museum & Gallery education』(1991)、『Museums and their visitors』(1996)、アン・ピアソン氏の「Touch exhibition on United Kingdom」及び、ウィリアム・キアビー氏の「Paintings and visually impaired people」『Museums without barriers』(1991)などである。

こうして英国の触察展示の流れを追ってみると、初期の触察展示は美術館から始まり、1980年初頭には自然系の博物館でも見られるようになり、報告書

の発行やセミナーの実施も1980年代中頃から、さかんになっていった。さらに、1980年代後半からは、博物館とギャラリー審議会により「Museum Resistration Scheme」のような英国の博物館全体の水準を高めることを目的としたガイドラインが作成されはじめ、1990年代には、触察展示に関するガイドラインも博物館内外で作成されるようになった。

4. 日本、英国の触察展示比較

日本と英国の触察展示の発達の比較において、共通点として、3点あると考えられる。それは(1)触察展示が本格化した時期、(2)個室、特別、短期的な触察展示から一般、常設、長期的な展示への傾向、(3)人文系、自然系の両博物館でその発達が見られることである。

(1)の場合、触察展示は、英国の場合1970年代後半、日本では1960年代に初期の報告が見られるが、共に1980年代から本格化している。これは、両国にとって、1981年の国際障害者年の影響が強かったことが伺える。

そして(2)の場合、初期の触察展示は様々な限界が存在したが、やがて多くの人に開かれ、また、統合されたものとして発達していく。この理由として、視覚障害に関係なく、私たちすべてにおいて展示に触ることが効果的であることへの認識と、資料の修復や保存技術の向上が考えられる。

さらに(3)の場合、触察展示が人文・自然系の両博物館に見られる理由として、この課題が博物館という機関自体の取り組むべき課題とする意識をもった結果であろう。

一方、いくつかの相違点も存在する。その顕著なものとして考えられる点は、英国の場合、(1)触察展示に関するガイドラインが作成されていること、(2)触察展示について多くの専門的機関との連携が発達していること、(3)視覚障害者が触察展示についての情報をわかりやすく得られていることなどがあげられる。

(1)の場合、触察展示に関してのガイドラインの作成は、上記の博物館とギャラリー審議会による「Disability Resource Directory for Museums」や英国王立盲人協会により作成された「Accessible Museum」に代表されるように、視覚障害者への理

解、対応・誘導・解説の方法、触察展示設置方法、補足資料、関連施設情報など細かく記載されており、各博物館での触察展示の設置の基準となっている。

(2)の場合、英国では博物館以外の専門組織との連携は、例えば英国芸術審議会や英国カーネギートラストのような組織は、美術館を中心として、資料の性質から触ることが難しい絵画や、紀元前の彫刻などの触察展示としての利用を早い時期に試みるなどに役割を果たしている。また、英国王立盲人協会などとの連携も、博物館が視覚障害者の理解を深め、関連した情報、技術を得るのに役立っている。

(3)の場合、英国王立盲人協会などが作成した「Discovery museums」などの発行物や、Museum Galleries Disability Association などの組織の活動は、視覚障害者へわかりやすく、触察展示を含む博物館のサービスの情報を提供しており、博物館と視覚障害者を結ぶ役割をしている。

以上に述べた各博物館における触察展示の体系的な指針に基づく設置、専門機関との連携、開かれた視覚障害者へ触察展示を含む博物館の情報は、結果的に博物館全体の一律の水準の向上を可能にし、また、触ることが難しいと考えられる展示物についても様々な利用法の発達を促している。

83頁左段2. の第1パラグラフが1行減るのかもしれませんが。

(写真解説)

①ナショナル・ギャラリー（ロンドン）

「センス・オブ・アート」プログラム

受付で触ることのできない絵画の代わりにレーザープリントされた絵とそのガイドテープを無料で貸している。

②ビクトリア&アルバート・ミュージアム（ロンドン）

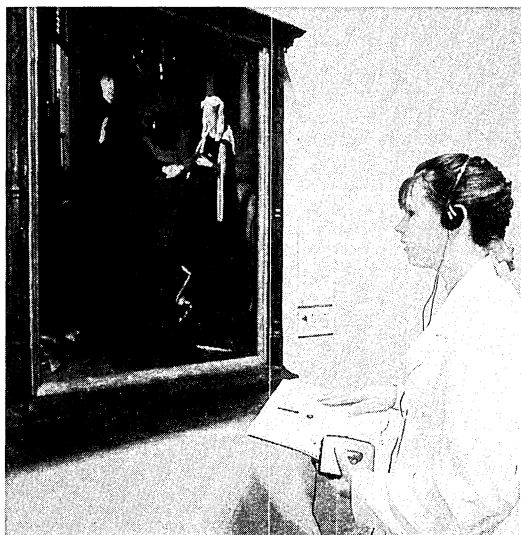
「触ることのできる絵画」を常設展示の一室に数枚展示している。

③大英博物館（ロンドン）

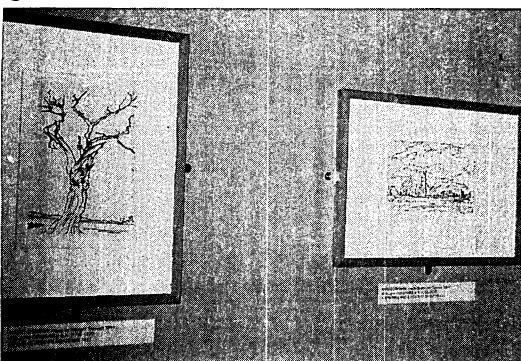
「プリーズ・タッチ」プログラム

視覚障害者のみ触ることのできる紀元前に作られた彫刻数十体が常設展示に配置されている。受付で、ガイドテープや拡大文字案内所を無料で借りることができる。

写真①



②



③



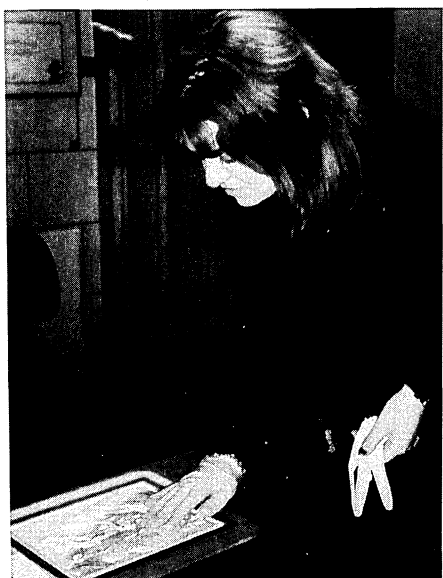
④



⑤



⑥



④ テートギャラリー（ロンドン）

「タッチツアー」プログラム

ボランティアの誘導と解説により、常設展示に配置された彫刻（実物）を触りながら回る。無料参加でき、手袋の貸し出しもしている。

⑤ テートギャラリー（ロンドン）

上の「タッチツアー」プログラム中のボランティアと視覚障害者

⑥ ナショナル・ポートレート・ギャラリー（ロンドン）

「受付での補足資料の貸し出し資料」

受付には、手袋をして触ることのできる彫刻のリスト、触ることのできる絵画を用意している。

① ナショナルギャラリー広報用借出用フィルム
1997.11.

② 1997.11.筆者撮影。

③ 筆者本人。

④ テートギャラリーパンフレットより。

⑤ 1998.4.筆者撮影。

⑥ 1997.11.筆者撮影。

5. おわりに

前章でいくつかの相違点を述べたが、実際、両国の博物館の定義、経済状況、人口構成や博物館の歴史的背景など多くの点で異なることも踏まえると、両国のそれら相違点の背景にある本質的な違い、決定的な違いは何であろうか。それは、触察展示を取り巻く「コミュニケーションの良さ」というキーワードが見つけれられるのではないだろうか。このコミュニケーションの良さとは、展示方法のそのものと、それらを取りまく博物館組織と専門機関などの外との連携である。ここで、このコミュニケーションのキーワードを日本の触察展示に当てはめた時、今後、どのような点の改善が求められるのであろうか。筆者は以下の3点があるように考える。

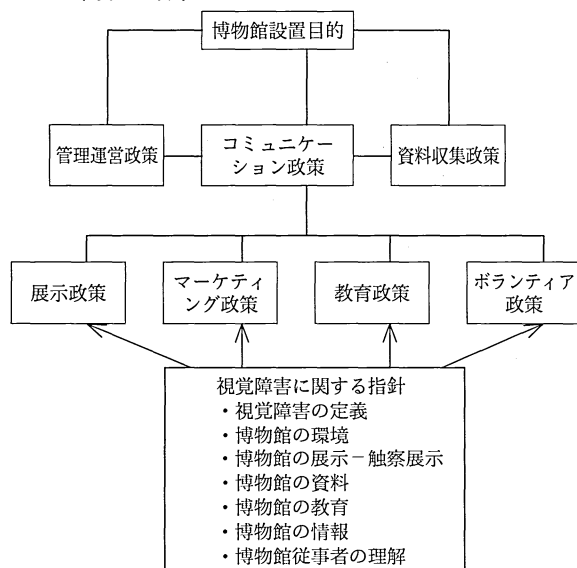
(1) 博物館全体の取り組み

英国の博物館の場合、多くのガイドラインに基づき、触察展示の設置を他の要素—例えば、博物館の環境(物理的条件など)、情報(広報など)、資料(パンフレットなど)と共に、発達させることに努力している。その理由として、触察展示は彼らの博物館

訪問の流れの中に存在し、たとえ展示が望ましい形にあっても、博物館訪問が可能になった場合、初めて機能するためである。また、その政策には、博物館従事者すべてが取り組まれている。その理由として、博物館の活動の中でコミュニケーターとしての潜在的な力は、来館者へ直接接することはなくとも究極的に博物館の運営管理者の手中にあると考えられ、一方、無償のボランティアなども、受付対応や解説などで直接に来館者に接する場合も多く、直接的なコミュニケーターとしての力を持っており、その人数も多く存在するためである。

実際、日本の場合触察展示は、個人的任意や教育部門などの1つの部門、分野の中だけで模索されたり、博物館のボランティアや短期契約者などは、博物館の運営政策から切り放されている場合が少なくない。また、触察展示に関するガイドラインも発達していない。そのため、各博物館が、彼らの博物館訪問の流れの中で、触察展示が発達していけるように視覚障害者へのサービスに関する政策を確立し、その中で触察展示を発達させることが望ましい。

博物館の各分野に反映した視覚障害者へのサービスに関する政策



(Hooper-Greenhill, 1992)

(2) 専門機関との連携

触察展示の発達には、博物館内部の体系的な政策に基づく取り組みだけでなく、博物館外との連携も必要である。その理由の一つは、博物館が社会と共に機能しており、交通機関や広報など博物館だけの機能で備えることができないことにある。また、博物館の組織だけで、触察展示に関する技術や知識も整えることは難しい。英国では、英国芸術審議会、英国王立盲人協会をはじめとする連携は、様々な触察展示を発達させることができ、視覚障害者を理解するための情報や技術が博物館の中にもたらされている。日本の場合も、盲学校、そして近年の日本障害者文化協会の活動などがあげられるが、より多様な専門との連携が求められる。

(3) 視覚障害者への理解

日本で、現在、法律上で視覚障害を持つ人は、増加している。1995年で2,722,000人の身体障害者がいるといわれ、そのうちの13%は視覚障害者である。また、18歳未満の身体障害児の数は、81,000人といわれ、4.8%を視覚障害児が占めている。その総数は、視覚障害者の場合、年々増加している。一方、18歳未満である視覚障害児の数は、年々減少しているものの、その障害の程度は重度化している。視覚障害者を理解する上で大事なことは、このような数値上の増加より、将来、視覚障害を持つ人が多様化、重複化していくことである。

例えば、視覚的な衰えを含む視覚障害は、高齢との関係が切り放せない。現在、厚生省人口問題研究所「日本の将来累計人口」(平成4年9月推計)によれば、1995年の65歳以上の高齢者は全人口の12.5%、2005年に19.1%、2025年には25.8%になると推測されている。

また、視覚障害の状態も、人によってその原因、程度、見え方も様々である。例えばある人は、対象物がぼやけてしまったり、またある人は、トンネルのように視野が狭く、さらに聴覚障害などの他の障害を合わせて持つ人もいる。

さらに、視覚障害者にとっての実際の触覚の働きは、個人の経験や意識、訓練によって異なる。例えば沼田真氏は、『自然保護という思想』という著書の中で、全盲の写真家があることを記述している。

これらのことは、「視覚障害者＝見えない」「視覚

障害者のアクセス＝触察展示」という単純な方程式でないことを伝えるものである。

また、主観的で厳格な展示評価、博物館を訪れた人からのアンケートなどの客観的な評価に加えて、博物館に行ってみたいが一人では外出の制限があったり、博物館に興味はあるが、その博物館情報が入らない人などの潜在的な視覚障害を持つ来館者がいることにも注目し、彼らの声を聞いていく必要がある。

以上、筆者の限られた文献をもとに、日本の触察展示の発達のために、今後触察展示を取り巻くコミュニケーションの改善をあげてみたが、今後、触察展示が目的を混同することなく、また、決して視覚障害者を他の来館者や社会から隔離されたものの、あるいは特別なものとしてではなく、それらと「つながり」をもちながら、博物館の機能上に発達していくことを願う。

参考文献

- 「視覚障害者コーナー設置の博物館活動」大橋桃之『博物館研究』Vol.16 (7)、1981年。
- 「全国の博物館園における視覚障害者の対応に関するアンケート調査結果報告」奥野花代子『神奈川県立博物館研究報告 自然科学』27号、1998年。
- 『「見る」ことから「なぜ見るのか」の問いにむけて』角田美奈子『ドーム』Vol. 8、日本文教出版、1993年。
- 「欧米の博物館と障害者」河野哲郎『美術館教育研究』Vol. 4 (2)、1993年。
- 「英国における博物館とギャラリーのための障害者に関するガイドライン」河野哲郎『美術館教育研究』Vol. 5 (2)、1994年。
- 「視覚障害者向けの録音テープ製作と動物園教育」香川洋二『博物館研究』Vol.16 (7)、1981年。
- 倉田公裕・矢島國雄『博物館学』、東京堂出版、1997年。
- 「博物館施設と盲人指導」小森厚『博物館研究』37 (5)、1964年。
- 『視覚障害者のための触察展示』埼玉県立自然史博物館、1984年。
- 「緑の風が見えますか」佐々木喆彦『美術館教育研究』Vol. 5 (2)、1994年。

- 「大英博物館とルーヴル美術館における視覚障害者のためのツアー」佐藤厚子『美術館教育研究』Vol. 4 (2)、1993年。
- 「盲学校教育と博物館」谷合侑『博物館研究』37 (5)、1964年。
- 「視覚障害者と博物館」拓殖千夏『博物館学雑誌』、Vol.20 (1-2)、1985年。
- 「目の不自由な人のための優しい博物館のあり方を求めて」鳥山由子ほか『博物館研究』Vol.33 (1)、1998年。
- 「博物館における視覚障害者への対応」中島東夫『博物館研究』Vol.17 (1)、1982年。
- 『触れる喜び—手で見る彫刻展』名古屋市美術館、1989年。
- 成子良子「千葉県博物館研修会」、千葉県博物館協会、1997年。
- 沼田真『自然保護という思想』、岩波文庫、1996年。
- 「視覚障害者と三重県立美術館」森本孝『ドーム』、Vol. 8、日本文教出版、1993年。
- 「視覚障害者と博物館」久住典夫・三輪克『博物館研究』Vol.16 (8)、1981年。
- 「触覚による芸術表現の可能性」平井章一『ドーム』Vol. 8、日本文教出版、1993年。
- 「国際障害者年と宮城道雄記念館」吉川英史『博物館研究』Vol.16 (7)、1981年。
- Art Council (1993) Arts and Disability, Art Council, London.
- Cole, P.(1985) Please Touch, British Museum, London.
- Fondation de France and ICOM (1982) Museum without Barriers, Routledge, London.
- Hooper-Greenhill, E.(1992) Museum & Gallery Education, Leicester University Press, Leicester.
- Hooper-Greenhill, E.(1996) Museums and their Visitors, Routledge, London.
- Museums & Galleries Commission (1993) Disability directory, MGC, London.
- Royal National Institute for the Blind (1992) Accessible Museums, RNIB, London.
- Royal National Institute for the Blind (1993) Discovering Museums, HMSO, London.